「教育の総本山」への願いを込めて

諸富祥彦
千葉大学教育学部助教授

こんな私です

私は，筑波大学第二学群人間学類を1986年に卒業しました。たしか，第7期か8期だったと思います。学類時代の私はプロレス研究会の会長（顧問は体育科学系の森岡理右先生）とカウンセリング研究会の代表（顧問は心理学系の松原達哉先生）の2つのサークルの代表を務めさせていただきました。

学類時代を筑波大生としてすごされた方であれば，学園祭の折，ある時は第二学群の食堂を貸し切って，またある時は図書館前広場でプロレスのリングを作って暴れまくっていた学生がいたのを記憶されている方もおられるかもしれません。あるいは，やどかり祭（宿舎の祭）の折，暴れていた学生がいたことを。その時，チャンピオンとして不謹慎な真似をしていたのが，私です。リングネームはゾンビ・ザ・グレーテスト。同級生は，諸富というより，“ゾンビ”と言った方が憶えている方も多いかもしれません。

もう一つのカウンセリング研究会の思い出は，学部の一年生の折より大学院博士課程の院生の方と共に学ばせていただいたことです。これは何より大きな刺激となりました。そのせいか，この研究会に在籍していた学類生の半数近くが大学教員，また残りの半数近くが専門職（カウンセラー）として活躍しています。これは，学部と大学院が分別されている現在の勤務校ではありえないことで，ここに筑波の最大の魅力があるのかもしれません。

大学院は教育学研究科の出身です。博士論文は故遠藤昭彦先生の御指導の下，自身の悩み多き思春期青年期の自己成長の過程を現象学的に自己分析した「人間形成における＜エゴイズム＞とその克服過程に関する研究―主体的経験の現象学による接近―」（風間書房より刊行）で学位をいただきました。

学部，大学院，オーバードクター（日本学術振興会特別研究員）をあわせると計11年間を筑波の地ですごしたことになります。まさに私にとって第二の故郷です。この11年間でたたき込まれた知識，経験をいかして，本を書きまくり，現在，単著のみで20冊，編著，翻訳などをあわせると約50冊の著書があります。今年はNHKラジオ第2放送「こころを読む―生きがい発見の心理学」も担当しました。お陰様で「大学ランキング2003」（朝日新聞社）による「2001年メディアに登場した大学教員」では総合（オールジャンル）ランキングで第10位となることができました。これもひとえに筑波で御指導いただいた先生方のお陰と心より感謝いたしております。

先日，修士課程の非常勤講師としてお招きいただき，感慨ひとしおでしたが，校舎の老朽化に年月の経過の早さを思い知らされました。

世間に打って出ていただきたい

私が筑波で学んだ教育学やカウンセリングは，今も昔も“日本の総本山”であります。

“教育の総本山・筑波大学”として，学会などのアカデミズムばかりでなく，世の教育論議をリードしていただきたいと切に願う次第です。

教育関係者は都会で育つ！？

全国ネットワーク「悩める教師を支える会」の代表として全国の学校現場を駆けめぐっている私の実感は，『教師は，教科を教えるプロである以前に，人間関係のプロでなくてはならない」ということです。

今や，教師が教師であるというだけで，親や子どもから敬意をもって遇される時代は終りました。マスコミの学校（教師）バッシングの余波もあってか，今や，親や子どもが教師をコントロールしようとする時代です。学級崩壊など，教師を振り回す子どもたちの問題と共に，「最近，保護者が変わってきました。クレームを付けなきゃ損，とばかりにあれこれ言ってくる親が増えたのです。“困った親とのつきあい方”を教えて下さい」という相談も急増しました。この点については，拙著『子どもよりも親が怖い―カウンセラーが聞いた教師の本音―』（青春出版社）をお読み下さい。

もう一つ，教師最大の悩みは同僚や管理職との関係の問題。子どもや保護者との関係で悩んでも，それだけで退職，休職，精神疾患に追い込まれる教師はそれほど多くはありません。休職中の教師，

うつ病で苦しむ教師のカウンセリングをしていますと，最初は子どもとの関係，困った親との関係で悩み始めていても，大きな落ち込みの直接の原因は管理職，特に校長に相談した時，「それは君の教師としての能力の不足が問題じゃないのか」と突き放されたことによるケースが大半なのです。「好きにやれ。ただし真剣にやれ。あとは俺が責任持つから」と宣言してくれる親分肌の校長がめっきり少なくなったと現場の教師たちは嘆きます。

このように，教師の人間関係の悩みの大半は①子どもとの関係の歪み，②親との関係の悪化，③管理職や同僚との関係のまずさ，とつまるところ，“人間関係の悩み”。私が「教師は教科を教えるプロである以前に，人間関係を切り結ぶプロでなくてはならない」と言う故縁ですが，そう考えるとやはり残念なのが筑波という土地の環境です。

もちろん，終電も気にせず宿舎やアパートで夜を徹して仲間と語り合うのも悪くはありません。これも筑波大生の貴重な財産です。しかし，都会のさまざまな人間関係にもまれて身につくことがあるのもまた事実。せめて，人間学類や教育学研究科，心理学研究科等の教育・心理系の教育機関だけでも大塚にUターンできないものかと思うのですが，やはり無理なことなのでしょうか。

以上，母校を愛するが故，色々とたわ言を述べさせていただきました。一つ言えることは，筑波大出身者は—私を含めて—愛校心がきわめて強い，とういうことです。筑波で培った仲間同士のネットワークが私の最大の財産となっています。

最後に私を御指導くださいました先生方，本当にありがとうございました。

（もろとみよしひこ　カウンセリング，
教育臨床学　道徳教育）